

今年も夏が暮れて

二〇一二年夏休み、八歳になる息子の大地と福島県へ行った。午前三時半半並にある家から環状八号線を北上し、東京外環道川口で東北自動車道へ乗り換えて福島を目指した。出発した時にはまだ真っ暗だった空が徐々に明けてくる。後ろの座席では幼い子供が寝息を立てている。そんななかで、今回の福島行きについて考えてみた。

今回の福島行き、旅の目的は自分のなかにふたつあった。一つは、安達太良山と阿武隈川を見ること。「樹下の二人」のなかで、高村光太郎が「あれが阿多羅山／あの光るのが阿武隈川／ここはあなたの生まれたふるさと」と書いた山と川だ。その山と川を、光太郎の妻智恵子が「本当の空」と呼んだ空の下で見たいと思った。光太郎は「智恵子は遠くを見ながら言ふ。阿多羅山の山の上に／毎日出てゐる青い空が／智恵子の

山本太郎

本当の空だといふ。あどけない空の話である」と書いた。あどけないがそんな青い空を大地と見てみようと思ったのだ。もちろん、大地はそんなことは知らないし、そんなことに興味もないと思う。ただ最近学校で習ってきたのだから、「さわってみようかなあ つるつる／おしてみようかなあ ゆらゆら」で始まる、谷川俊太郎の「どきん」という詩を時々口にする大地に実感できるものを見せたいと思ったのかもしれない。詩は続く。「もすこしおそうかなあ ぐらぐら／もいちどおそうかなあ がらがら／たおれちゃったよなあ えへ／いんりょくかんじるねえ みし／みし／ちきゅうはまわってるう らい／かぜもふいてるよお そよ／あるきはじめるかあ ひたひた／だれかがふりむいた！ どきん」と。

自らの周囲に興味や関心を持ち始めた幼子が、周囲にあるも

のを触り、押し、倒し、そしてその先に地球や風を感じる。そのとき、ふと自分以外の誰か他人の視線を感じて振り向く。そのとき他者の存在に「どきん」とする。新しい世界と出会った時の幼い緊張と実感がよく表現されているこの詩を聞いた時、なぜか光太郎の詩を思い出し、ふいに、福島行きを決めた。

郡山で東北自動車道と分かれ磐越自動車道へ入るあたりで、かすかに安達太良山が見えた。車を止め、空を仰いでみた。切っても切れない空が見えた。そこは、一年半ほど前、新潟から磐越経由で東北へ入ったときに通った場所だった。その時の東北は、まだ春も遠く、雪でも降りそうな曇った空に青い空を見ることができなかった。翌日、その空を放射線という名の雲が覆ったことを知ったのはそのまた翌日だった。そのことを大地に話そうかと思つてやめた。理由はよくわからない。ただ、うまく説明できる自信がなかったかもしれない。

大地の通う小学校でもあの日以降、沖繩や大阪に疎開した子供たちがいた。「疎開できる人はいいわね」と言った大人がいた。そんなことや、あれこれうまく説明する自信がなかったのだ。

旅のもう一つの目的は、その近くでキャンプし、夜、星を見ることがだった。

かつて智恵子は「東京には空が無い」と言った。いま東京にも青い空は広がる。だけど、満天の星を見ることはできない。第一の目的は果たしたが、第二の目的は果たせなかった。その

夜、突如天気が崩れ、空は雲に覆われた。テントで沈没し、雨の音だけを聴いた。それはそれでよかった。

翌日、再び快晴の空が広がった。裏から見た磐梯山が山体崩壊の跡を残した荒々しい姿を見せた。左手には安達太良山も見えた。

*

それから一週間ほど。まだ暑さの残る八月も下旬に入った頃、医師と看護師、若い二人の結婚式に出席した。手作りの結婚式だった。二人は、沖繩にある離島の診療所で知り合い、約二年の交際を経て結婚した。

男が沖繩での研修を終え、私が勤務する大学に大学院生として入学してきたのは一年一〇カ月ほど前の秋だった。開発途上国での医療に関心はあるが、まだ何をすべきか決まらない頃だったと思う。

その男が九月、出身地である岩手の県立病院に就職し、働きながら研究を行うという。震災から一年半が過ぎた。しかし東北の復興はまだその途上にある。震災時、男は沖繩にいた。沖繩の、野戦病院とも呼ぶことが相応しい病院で男は日々忙しく働いていた。しかし、そのことで男はあの日故郷である現場にいなかったという負債を抱えた。その負債を男はこれからの人生で少しずつ返していくのである。今回岩手に帰るのはその第一歩だと言ったことがある。

女は京都の出身だった。早くに母を亡くし、父親に男手一つで育てられた。しかし女は男と結婚し、今後の人生を岩手で過ごすことを決めた。育ててくれた父へ少しでも恩返しができればと、若い二人は結婚式を挙げる場所として京都を選んだ。岩手や沖繩からも友人が駆け付けた、二人の結婚式は、多くの仲間に見送られた素敵なものだった。

*

そんな若い二人の結婚式の余韻に浸っていたとき、一本の計報が届いた。結婚式が行われたと同じ京都からだった。二人の結婚式が行われた場所から直線距離にして一キロメートルにも満たない、御所を挟んだ鴨川の向こうが、男の最期の場所だった。享年五九——。酒をこよなく愛した男のあまりに短い一生だった。だれの言葉か知らないが、「神は、あまりよく眠らなかったものには、人より長い眠りを与える」という言葉がある。とすれば、神は男に長い眠りを与えたのだろうか。

告別式では二人の男が弔辞を読んだ。一人は亡くなった男の親しい先輩で元同僚の男。退職して五年ほど経つ。もう一人は亡くなった男と小学校から高等学校まで一緒だったという男だった。元同僚の男はまず、一〇歳年上の自分が君の弔辞を読むことになることは想像すらしなかったと述べた後で、これから忙しくなると弔辞を結んだ。これからの数ヶ月、あるいは一年、亡くなった男が愛し通った飲み屋を一軒一軒回り、店の主人と

男の思い出話をする。男が愛した飲み屋が何軒あるか分からないが、その全てを回る。だから忙しくなると言った。

同級生だった男は、亡くなった男が高校生だったとき「幸せ教」を作り自らその教祖となったという逸話を紹介した。どんな嫌なことをされても、どんな嫌なことを言われても「ありがとう」と言うというのが唯一の教義だったと語った。あるとき、男は亡くなった男の頭を紙で作った棒で殴ってみた。帰って来た言葉は「ありがとう」だったと言った。

亡くなった男とは、一六、七年ほど前、私が東京大学の大学院生だった頃に文化人類学の研究会で知り合った。それ以降、親しくしてもらった。ある時、酒に酔った男は自分がなぜ文化人類学を専攻することにしたかを、少しはにかみながら語ってくれたことがあった。

男が学生だった頃、大学にはまだ学生紛争の余韻が漂っていたという。男は、その時代の風を全身に浴びた。その頃、「造反には道理がある」として、初期の文革やクメール・ルージュの活動に理があるかもしれないと考えたことがあると吐露した。情報がない時代の話だった。ところが、そうした運動や政治の実態が明らかになるにつれ、男は深く失望した。世の中に絶対正しいということはなく、自らの立場を文化的相対主義の上に置くことを心に決めた男はその時語った。男は自らの専攻を文化人類学に変えた。

当時男は北海道大学にいたが、私が京都大学へ移ったとほぼ

時を同じくして京都大学へ移ってきた。その後私は米国、ハイチと海外での仕事が続ぎ、帰国後も外務省、長崎大学と勤務先が変わった。

最後に会ったのは、二年半ほど前だった。京都へ来ないかと私を誘うために男は長崎へやって来た。その時「うん」とは言えなかった。男は言った。「まあいいか。それも人生。今日は山本さんと呑もう」。

*

男が死んで少しした頃、初秋の風が吹く北の山を、上ホロカメットク山から鞍部にある避難小屋を経て、標高二〇七七メートルの十勝岳まで稜線に沿って歩いてみた。安政の噴火口から上ホロ分岐を過ぎ上ホロカメットク山へ至る道は長い階段が続く。アイヌ語で「川が本流に對し逆流するところに聳えた山」を意味するという上ホロカメットク山頂から南西には富良野岳が見え、さらに十勝岳山頂からは北北東に、いにしえからのこの地に暮らしていた人々が「カムイミシタラシ神々の遊ぶ庭」と呼んだ丘陵が、見渡す限りに広がっていた。その先にあるのは、オブタシケ山、そしてトムラウシ山だ。いつかこの辺りを、テントを担いで縦走してみたいと思った。その頃、息子の大地はいくつになっっているだろうか。まだ、父と遊んでくれるだろうか。三泊か四泊かの山行を一緒に歩いてくれるだろうか。空は高く澄み、前日までの雨が嘘のように晴れ渡った。避難

小屋には、熊へのお願いと書かれた貼り紙が風に音を立てていた。「ここは、人間が避難するための小屋です。何もありません。この周囲に棲み付かないでください」。

見下ろせば富良野平野の緑豊かな、爽りの風景があった。そういえば、その時思い出した。十勝平野を含めたこの辺りは、日本の穀倉地帯であり、酪農の中心地だということを。食糧自給率はカロリーベースだが一〇〇パーセントを超える。周辺を含めた人口が約五〇万人のこの地域は、実に五〇〇万人を超える人口を養うことができるというのである。

山から下り、バス停でバスを待った。その間、年老いた男がやって来た。「いいところだ。なあ」と、何気なく始まった会話に、肌を刺すような寒さを感じた。「このあたりは、何でもできるところだ。自然は厳しいかも知れんが、食うには困らんとこだよ」と。そのとき、夏の終わりに亡くなった男のことをふと思い出した。男は昔言ったことがある。「農は国の基本だよ。いつの時代も」。

年老いた男が、日本海沿いの、留萌近くの漁村からこの地方の農家に養子にきたのは五三年前のことだったという。その時三五〇軒以上あった農家は今は五〇軒にも満たないと男は言った。「それでも、オラは田畑を四倍に増やした。子供は娘一人だが婿をもらって、それでも孫は男二人。初代が男で、二代が養子、三代のオラと、四代も養子で、一〇〇年振りの男の子だ」と。男の顔は、どこか自慢げだった。理由はわかるような

わからないような気がした。

男とは、その後少し話をして別れた。爽やかな風が吹き抜けた。見上げると十勝岳連峰にイワシ雲がかかっていた。夏が終わろうとしていた。

*

暑かった夏も、楽しかった夏も、そして哀しかった夏さえいつかは終わる。

永遠に続くかと思うほど長い夏休みがあった少年時代から、それはいつもそうだった。

『好評既刊』

長い道

宮崎かつゑ 長島のハンセン病療養所、長島愛生園での生活から生み出された瑞々しい文章の数々。料理研究家である辰巳芳子さんとの対談「生きなければわからないこと」を巻末に付す。二五二〇円

闇を光に ハンセン病を生き延びて

近藤宏一 神谷美恵子が『生きがいについて』執筆にあたり大きな示唆を受けた近藤。詩と音楽をこよなく愛し、ひとりの個人として誇りある生き方を貫いた姿は、広く静かな感動を呼ぶ。二五二〇円

時の余白に

芥川喜好 練達の実業記者が、世相の片隅に息づいている美を手がかりに現代社会を照射する珠玉エッセイ66篇。濃やかな取材をとおして美の内実に向き、本当のゆたかさを問う定点観測。二六二五円

精神医療過疎の町から

阿部恵一郎 一人の精神科医が北海道名寄市でクリニックを開業した。日本最北の精神科クリニックである。膨大なうつ病患者、頻発する自殺、北国の人々の姿を静かに描いたエッセイ集。二六二五円

(価格は税込)